

復活節キリスト道講演会

「永遠の生命」を生きる(一)

2016年3月27日(東京 新宿)

奥田 昌道

いつまでも滅びないもの 「あげるよ」「はい、いただきます」 聖書でいう「永遠」とは 我は在りて在らしむるもの 人間のエゴイストが罪(業) 祈っていれば眩い姿に変貌 天国へ行く道 神の義と愛 私が業を全部引き受けた 死んだ後の行き先 イエスは二重国籍 選手はベントのサインを見て走る 聖書でドラマチックにイエスと向き合う するしの奥に隠されているもの 終わりの日は今 霊の生命 光輝高霊者 石をとり除けよ 鴨川温泉キリストの湯 キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きる わたしたちの本国は天にある 霊の体が復活する

いつまでも滅びないもの

皆さん、よくお出でくださいました。私は、24歳のときにキリストに出会っていたのですが、60年になります。出会っていたのだというしかない。もちろん、顔を見ただけではありません。I君という非常にその頃燃えていたクリスチャンの先輩が大学院にいました。私は悩んで悩んで、

「もう明日はどうしよう、もう死にたい、死にたい」という気持ちでいた時に、彼が輝いていました、

「何をそんなに悩んでいるんですか?」

と、人ごとみたいに言う。私は夜に京大の構内をさま迷ってお話を聞いた時に、彼は本当に輝いていました。私はそういうものに出会えたら、もう自分としてはそれに従いたいという、切羽詰まった思いだったので、すぐに彼がやっている小さな集まりに行った。フィナンランドの宣教師が夏休みでに帰っている時に、彼は代役を仰せつかって、活き活きと話しておりまして、それによってきっかけを与えられた。それから、いろいろ紆余曲折はありましたが、特に私に大きな影響を与えてくださったのは小池辰雄という先生が——1996年に92歳で天に帰られました——本当に生きた信仰というものはこういうものだと、そういうことを身をもって現してくださいだったので、それで私も導かれて今日に至っております。

これは見えない世界のことです。この永遠の生命だとか、神さまだとか、と言いましても、全く見えない。だから、

「見えないものを信ずるといふのはバカでなからうか」

と、科学の毒に毒されている方はそんなふうに思われると思いますけれども。見えないものはいっぱいあるじゃないのと。だいいち、皆さんがやっているスマホとか携帯とか、あ



これはみんな見えない電波が飛び交っているわけです。それをキャッチしてそれぞれ応答したりしているわけですよ。世界中で何人やっているのでしょうか、それが衝突しないでよくもまあ届くものだと、私なんかは感心している。私自身はスマホもやりません、携帯も持ったこともない。自分で絶滅危惧種といっている。そんな人間は今おらんだらうと思えますけれども。

世の中には不思議なものがいっぱいあります。だから、神さまの世界が不思議だと言ったって、ちつともおかしいことではないと思う。だいたい、見える物とか手でつかめる物とか、そんなものだけを存在だと思おうのが間違っている。

まさに「永遠の生命」とか、「神さま」「キリスト」とか申しましても、見えない世界のことです。私自身がいわば二重国籍です。地上に人間として、国籍というか所在をもっていながら、同時に私は天の次元をずっと生きています。天の次元に生きている人間なんです。だから、今日お話しするのは、思われている世界ではなくて、リアリティ（実在、現実性）なんです。リアリティを皆さんに告白するだけの話です。

私ももう今83歳ですので、仮にあと20年あって103歳、まあそのくらいまでは何とか地上に居るかもしれませんが。でも、100のうちのもう8割は終わってきている。だから、地上はあと短いわけです。皆さんは大方は私よりお若いから、まだまだ先の話だと思っておられるかもしれませんが、あつというまですよ。そのあつというまに何を味わっていただきたいかという、この「永遠の生命」なんです。本当にそのために100年なら100年という生涯が地上に与えられている。その間にいろんな経験をして、その経験の中で、しかしそれを突き抜けて、

「いつまでも滅びないもの、いつまでも存続するもの、いつまでも輝き続けるもの、生命にあふれたもの、それを見出しなさいね」

というのが神さまの思召おぼせしだと思う。しかもそれは、自分から作り出せるかというところ——自分の中から永遠の生命を作り出せれば問題ないけれども——これは無理です。いくら山中伸弥先生に言ったって、それは無理だと仰ると思う。IPS細胞を作ったって、同じものは出来ても、別種の永遠の生命、死んでも死なない生命、この地上の次元ではない天上の次元の生命、これをつくりだすことは人間には不可能です。

「あげるよ」「はい、いただきます」

では、どうするの？

「神さまが下さるんだ、いただくんだよ」

と。そうでしょ。いただく他ないわけです。

「そんなものはいただきたくない。俺は乞食ではない」

「それなら、あんた、どうするの？」



「はい、はかなく土の中に消えるだけです」

「それでいいの？」

と。人間は、自分では自分を越えた生命は創りだすことはできません。自分と同じ質の生命は子孫に伝えていくことはできません。およそ生きとし生けるものはみな子孫を残したがつています。時には、もう子孫をつくれれば、あんたはもうご用は終わりだといって死んでいく動物たちもいる。そのように、この世の生命というものは個体から個体へ、末代まで存続させていくことができるかもしれないけれども、この世の次元を越えた天の次元の生命——これは神さまの領域です——神さまの領域のその生命を人間がプロデュース（産出）することはできません。これはもういたたくしかかない。それをいただくとして、難行苦行を、仏教のほうの方だったら大変な修行をなさったりするそうですけれども、我々のほうは何も修行なんかいらぬ。

「あげるよ」

「はいっ、ありがとうございます」

と言ったらそれでおわり。「あげるよ」と、これは神さまの思し召しだから。神さまが我々に関わりをもつてくださるのは、ご自分のところにある生命いのちの世界、幸せな世界、本当の生命輝く世界、これを何とか地上にもたせたいという、それが神さまの御意みこころです。その御意を一身に負って地上に現れてくれたのがイエスというお方だったんです。イエスというお方は天に居られた方です。ヨハネ伝なんかはそう言っています。初めから神と共にあった「ロゴス・キリスト」という言い方をしています。霊なる言ことば。霊言ことばです。

明治の聖書では、

「初めに霊言れいげんは言いふ」

と書いてあったらしい。その「霊言れいげんごさる」の、ごさった霊言が実に受肉して、人の形をとってマリアさんの中に宿った。そこから話は始まっていくわけです。やはり、天にいらしやうった方だからこそ、地上に来てても天のことを語ることができる。天のことを知らない人間がいくら天上のことを想像したって、始まりませんものね。だから、天にある本当のリアリティ、これが永遠なんです。その永遠なるものを地上にもらたしてくれた。これがイエスという方なんです。

今日のテーマは「永遠の生命を生きる」という題です。そもそも、永遠とはいったい何ですか。永遠といったら普通は、「いつまでも続くもの」と思われます。でも、いつまでも長続きするというだけでは、この人間の命だつて、個体から個体へつながって、いつまでも長続きしてきます。けれども、それを永遠とは申しません。やはり、永遠というのは何か質的に別次元なもの、質的に滅びないもの。たとえ個体であつてもその個体の中に永遠が宿つたら、その個体は滅びない。いつまでも輝き続ける。

つまり、地上ではみんな永遠ではない。地上では限りがある。でも、天の世界というのは、



限りがない。地上の我々の思いを越えた別次元のものである。それを引っさげて、

「それをあげるよ」

と言って来てくれたのがイエスという方なんですから、これをもらうしかない。

「いらん」

と行って断ったら、

「そうか、ではまたね」

と行って、時がくるのを待ってらっしゃると思えますけれども。皆さんがここへお出でくだされたのはイエスさまから、

「あげるよ」

と言われたら、

「いただきます」

ということでしょう。大阪の人なら、

「それはなんぼでもらえるの?」

「あかん、お金で買える世界やない。お金だしたってダメだ」

「どないしたらいいの? 難行苦行?」

「それもダメ」

「じゃ、どないするの?」

「ただで受けとりなさい」

と。誇り高き人は、

「ただで受けとるのはいやだ。何かお返しせんならん」

「では、何でお返しするの。お返しできっこありませんよ」

と。そういう世界なんです。

だから、もう一度申しますと、永遠というのは、そんないつまでものんびんだらりと続いていくというものではなくて、そういう次元を超えた、時間の永いとか短いとかそんなことには関わりのない、別次元の天の次元の事態を、言葉でいうならば、「永遠」という言葉で言い表すしかしようがないのではないかと思います。時間を超越した不滅なる事態、質的な輝きを持ったもの、とでも言っておきましょう。

聖書でいう「永遠」とは

では、聖書で「永遠」というのがどんなところに出てくるかを見ますと、まず旧約聖書の中に二ヶ所ほど出てきます。一つはノアの洪水のあとで、創世記9章8節から17節に出てくる。ノアの洪水でみんな死んでしまいうんですけれども、ただノアの方舟はこぶねの中にいた動物たちだけが生き残ったという。神さまはそういった永い永い大雨で生き物が全部死んでしまったということを、若干後悔されました。そして、もう二度とそんなことはしないと



いうことをお約束になる。

「⁸神はノアと彼の息子たちに言われた。⁹「わたしは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、契約を立てる。¹⁰あなたたちと共にいるすべての生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜や地のすべての獣など、箱舟から出たすべてのもののみならず、地のすべての獣と契約を立てる。¹¹わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがごとごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こつて地を滅ぼすことも決してない。」¹²更に神は言われた。「あなたたちならびにあなたたちと共にいるすべての生き物と、代々としえにわたしが立てる契約のしるしはこれである。¹³すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約のしるしとなる。¹⁴わたしが地の上に雲を湧き起こらせ、雲の中に虹が現れると、¹⁵わたしは、わたしとあなたたちならびにすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた契約に心を留める。」

神さまにとつても、虹が現れたら、「あつ、私はあの獣たち、人間たちとこんな契約を結んだということを自分も思い起こすからね」というわけですね。

水が洪水となつて、肉なるものをすべて滅ぼすことは決してない。¹⁶雲の中に虹が現れると、わたしはそれを見て、神と地上のすべての生き物、すべて肉なるものとの間に立てた永遠の契約に心を留める。」

ここに「永遠」という言葉がでてくる。「永遠の契約に心をとめる」という。

それからもう一ヶ所出てくるのは、ソロモンの伝道の書というところ。伝道の書の3章11節に、

「よろずのことに時あり……笑うに時あり、泣くに時あり、生きるに時あり……」
ということがならんでいて、そのあとに出てくる。

「¹¹神のなされることは皆その時になつて美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。」(伝道の書3:11)

ここに「永遠を思う思い」という言葉が出てくる。私は若いときにここを読んでものすごく感動しました。私はなにかロマンチックな思いで、永遠とか、永遠の愛とか、そういうものにあこがれていた。

「永遠を思う思いは神から来ている。だから、永遠の愛に憧れたつて構わないんだ」
なんていうようなことを思ったことがあります。皆さんはどうですか。

その他、「永遠」ということだと思いますのは、あの結婚式の時にいつも読まれる、コリント前書13章の「愛の讃歌」があります。

「愛は不滅である。愛は決して滅びない。信仰と希望と愛、この三つのものは



いつまでも残る。その中で最も大いなるものは愛である」（コリント前13・13）
と。こういう愛の不滅性、愛の永遠性をうたっているのがコリント前書13章です。

ではいったい、永遠の実在者はどなたかというところ、これは神さまなんです。神さまこそは永遠の実在者です。我々は消えゆく存在です。我々の自然的な生命というのは必ず消えます。けれども、神さま自身は永遠の実在者である。

我は有りて在らしむるもの

それは旧約聖書の出エジプト記に出てきます。3章。モーセが召される場面です。柴しばの中に火が燃えている。柴の中に火が燃えているのに、柴がなくならない。そこでモーセは不思議な現象だとおもって近づいて行くと、

「ここは聖なる場所である。靴を脱げ」

とあって、神はモーセに語られる。モーセはミデアンの荒れ野で牧羊していた。羊飼いで、奥さんと仲良く楽しい暮らしをしていたら、

「こんな所で遊んでいる場合ではない。エジプトへ行つて苦しんでいる民を救いだせ。私がついているから大丈夫だ」

「そんなことを仰つても、神さまの声を聞いてお前たちを救い出しに来たと言つても、民は誰も信用してくれませんよ。お前の出会った神さまの名前を言つてみると言われたら、どうするんですか」

その時に応えられたのは、

「我は有りて在るものなり」（出エジプト3・14）

という名であった。「我は有りて在るもの」という。我々は有るものです、そして消えるものなのです。神さまは「有りて在るもの」で消えないんです。永遠の実在者です。そういうお方が現れた。そういうお方の思し召しで私はやつて来たんだと、そういうふうには民に言えと。

「いや、それだけだったら、とても信用してくれない」

「じゃあ、この杖を持って行け」

と。その杖がへびになったり、いろいろな奇蹟を起こします。そういうお話が出エジプト記に出てきますけれども、あの時に、

「神の名は何ですか」

と聞いたたら、

「我は有りて在るもの」

つまり不滅なる存在、無くならない存在だと。しかも、私の恩師の小池先生はこれを、

「在りて在らしむるもの」

というふうに訳しておられます。ただ在るのではない。在ることが他者を生命づける、他者に生命を与えて在らしめる。これが神の存在だと。神がポツンとどこかに居るだけだったら、



何の値打ちもない。神さまは、いらつしやるといふことが直ちに他者をして生命づける。これが神さまの本質だと。つまり、愛だということ。愛というのは生命づけるもの。すから。その本質を小池辰雄先生は、

「神は在りて在らしむるもの」
あるいは、

「在らしめて在る神」

と言われた。

「お天道さんを見てごらんなさい」

と言われる。お天道さんは地球のはるかかなたに存在していながら、ずーっと地球を導いてきたんでしょ。地球は太陽の引力でもって一定の距離を保って、そして太陽の周りをグルグル回っている。そして自分自身もグルグル回っている。つまり、太陽があつての地球である。太陽というのは地球に光と生命を、熱を与えて、地球上の万物を活かしてめている。しかも、太陽に対して地球は何ひとつ恩返しをしません。太陽は与える一方です。ですから、私は、神さまというのはどんなお方かという、太陽のようなお方だと思う。在りて在らしめ、生命づけ、何もお返しを求められない。これが本当の愛の存在であつて、永遠不滅の存在だと。だから、

「あなたの信じている神さまとはどんな方か？」

と聞かれたら、

「太陽のような方だ」

と私は応えたい。

人間のエゴイストが罪(業)

キリストもあの「山上の垂訓」といわれるところで、

「神は太陽を悪しき者の上にも善き者の上にも昇らせ、雨を正しき人にも正し

からぬ人にも降らせてくださる。

つまり、あいつは悪い奴だからこうだとか、そういうことはなさらないで、無条件に無差別に光と愛を注いで、生命を注いでおられる。

あなた方も天の父の全きが如く全かれ」(マタイ5・45、48)

とキリストは言われる。とてもそんなことはできません。肉なる人間はできません。エゴイストだから、できません。自分に善くしてくれる者には善くしよう、しかし、そうでない奴は徹底的にやつつける。これが人間の本性です。仕方がない。しかし、キリストはそうじゃなかったんです。すべての人間のそういう罪——聖書は「罪」というけれども——私は、日本人は「業」と言った方がいいと思う。

「業が深い」



というようによく言います。つまり、エゴイストであつて、自分を第一に考える。

「神さまなんか、もし役に立つ神ならば使つてやってもいい」

「あの神さまのところに行つたら、子どもが授かる。では行こう。くれんかったら、恨むぜ」

「あつちへ行つたら、病気が治る。さあ、行こう。治らんかったら、けとばすよ」

とか。つまり、人間が主人公で、神さまを召使めしつかいのように使っているのが人間なんです。それを「業ごう」といいます。聖書では「罪」といいます。

無条件に、

「神さま、あなただけです」

と言うのはイエスという方だけなんです。イエスはご自分の意志というものはお持ちでない。

「あなたの御意みこころだけが私を通して現れて下さい。あなたはこの地上の人々に生命を与えるために私をお遣わしになりました。それを全うさせてください」

というのがキリストの祈りです。あのヨハネ伝の17章に「大祭司の祈り」といわれているところがある。

「私はあなたが語れと仰つたことを全部語りました。あなたの栄光を現しました。どうぞ今、御前で私に栄光を与えて下さい。もうやるだけのことはやりましたから、御許へ呼び戻して、そこで栄光を与えてください」

と。その時にキリストが仰つた。

「永遠の生命とは、唯一まことの神であるあなたと、あなたがお遣わしになつたイエス・キリストを知ることでありませう」

と。神さまと、神の遣わされたキリストを知る、からだごといただく、からだ全身が貫かれる、それに化せられる。それが永遠の生命だということ。

だから、

「永遠の生命を生きる」

という題の結論はそこにあるんです。キリストをお遣わしくださった神さまは、我々は直接その神さまを知ること、信ずることも難しい。見ることもできない。けれども、あの見える姿で現れてくれたイエスという方は、神の愛を一身に受けてそれを体現して、人々に善いことばかりをなさつた。キリストは生命の道を示された。そして最後は十字架にかかつて、人々のその業ごう、反逆、罪を全部背負いきつて、地獄まで落とされて、地獄で苦しんでいたやつを抱きしめて天に昇つて行かれた。燦然さんぜんと輝く素晴らしい栄光の姿で現れてきた。これが「復活」という事態です。

イエスが元の生命に戻るなんていう、そんなラザロの復活とは違います。ラザロは死んで墓に葬られて四日も経つていた。墓の前の、



「石を除けなさい」

と。キリストは祈られた。

「ラザロよ、出てこい！」

と言われたら、ラザロは出てきた。それは元のラザロであって、永遠の生命のラザロではない。これは仕方がない。まだイエスは十字架にかかっておられない前の段階ですから。けれども、十字架を通ってご自身があの栄光の姿で現れたキリスト。我々の業も罪も全部背負いきって、それを全部十字架で引きとって、地獄に落ちて、そして今度は燦然とあの素晴らしい姿で現れた。この方が本当のキリストのお姿です。そして天に昇って行かれた。つまり、姿は見えなくなった。

しかしながら、弟子たちは五十日後に——あのペンテコステといわれています聖霊降臨——あの十日間の祈りを経て、五十日目に聖霊が火のごとく降ってきた。聖霊という姿で弟子たちにキリストは化体されたわけです。伝道はそこから本当のものは始まります。それまでの弟子たちはもうユダヤ人を恐れて——というのは、イエスは宗教上の罪人として処刑されたんですから、イエスを信ずるやつはみな同類ですから——全部、命を狙われるわけですよ。

パウロ（サウロ）なんかその急先鋒です。ユダヤ人の律法のチャンピオンでした。だから、キリスト教徒迫害の、殺害の息をはずませながらダマスコへ向かう途中で、復活のキリストがバーツと現れて、白光のごとく現れて、ぶっ倒されたわけですね。

「サウロ、サウロ、なんぞ我を迫害するかっ！」

と。そこでパウロは仮死状態です。三日間、ものも言えない、目も見えない。アナニヤという人が来て、手を按いて祈ってくれた。そしたら、

「眼より鱗のごときもの落ちたり」

と書いてある。それで生まれ変わったわけですよ。そういう凄いことが出てます。あれは全部本当だと思います。キリストという方はそれだけの方なんです。

祈っていれば眩い姿に変貌

だいいち、キリストという方は、自分が十字架にかかるということをお示しになって、それから一週間がたってから、ペテロ、ヤコブ、ヨハネを連れて、山で祈っておられた。そしたら、そこで眩い姿に変貌されたということが、マタイ、マルコ、ルカの三つの福音書に出ています。そしたら、モーセとエリヤが現れてきて、どんなふうにイエスが十字架にかかって死なれるかという、その相談ごとをしていた。もうペテロとヤコブとヨハネはあつげにとられて、うわごとを言っているという場面があります。

あのように、祈っていれば、眩い姿に変貌するというのが本当のキリストのお姿であって、それまでの地上に歩んでおられるイエスの姿というのは仮の姿ですよ。あまり眩い姿



であらわれたら、人は近づけないもの。だから、人間と同じ姿で歩みながら、人間の苦しみ全部味わいながら、喜びも悲しみも全部共感しつつ、そして苦しんでいる者を助けたり、病んでいる者を癒したりなんかしながら、そのあげくのはてが十字架でしょ。こんな理に合わない話ってありませんよね。イエスのどこが悪くて、どこが気に食わんで、十字架につけて殺したんだと。そうでしょ、福音書を読みましてもね。

彼らが言うのは、

「お前は人でありながら、父と私は一つであるなんて、自分を神と同格にした。

これは神を冒瀆している」

と。これが一つの罪なんです。それから、

「安息日に人を癒した。これは安息日を破った。これも罪だ」

と。この二つだという。それに対してはキリストは、

「神は今に至るまで働きたもう。父は今に至るまで働きたもう。だから、私も

働く」

と言われた。だいたい、安息日というのは人のわざを休めて、神の生命を受ける。その日が安息日なんです。ウィークデイは自分のことで、せつせつせつと働いて、もう神さまのことなんか忘れていくかもしれない。けれども、安息日には一切の人間のわざは休めて、ただ上からくる恵みだけを受ける。それに自分を委ねる。それが安息日ということ。それは人を活かすために、人に生命を与えるために、神さまは、

「人間は休みなさい」

と言われた。その日にキリストは病める人をどんどん癒していかれた。神の御意だから、神が働いておられるから、仕方がないと。

「自分は無責任だ」

というのがキリストの言い分ですよ。

そんなことで、本当にあの福音書を見ますと、イエスという方と周りのユダヤ人、学者たち、祭司たち、そんなものとはもうケタが違いますから、レベルが、次元が違いますから、話が合わないんです。イエスはちゃんとそれを御存知だったと、もちろん思いますけれども、そういう生命を持ってきてくださった。それがイエスという存在なんです。もしも、人間は自然の命をいただいて——今は100歳以上の方が3万人以上いると言われてますので、私も3万人の中に入りたいたいなと思っっていますけれども——仮に100歳以上が3万人いて、今最高齢は、116歳がこないだ亡くなられたというので、115歳位とします。その後どうなるんですか。それで焼かれてお墓に葬られて、それでお終いなんですか。本当にそれでお終いなら、あまりにも儂はかないですね。

それで皆さん、慰霊祭とかなさる。慰霊祭とは何なんですか。人間は、肉体は滅びても靈魂は滅びない。靈魂はどこかで生きていますはずだ。それが変なところで迷わないで、必



ず然るべきところに行つてほしいから、成仏のためにお坊さんはお祈りになるわけですね。無縁仏にならないようにとお祈りになつたりする。かつて戦後もフィッツリッピンとかああいう激戦地にお坊さんが行つて、そこでお経を唱えて霊を慰めて来られたんですよ。これはしごく当然なことです。そのように人間というのは、肉体は土に還つても、死なない靈魂というのがいるんです。

ところが、その靈魂が、本当に幸せな天上の生命にあずかる靈魂は永遠に輝き続けますけれども、そこへ行けない靈魂はさ迷つて苦しむわけです。だから、靈魂が安らかであるようにというふにして、

「先生、安らかにお眠りください」

なんて、弔辞で言っているでしょ。あれは何のことかなと思う。

「安らかにお眠りくださいと言つたつて、おれは眠りたくないよ」

なんて言つておられるかもしれません。

要するに、地上で苦しんでいる靈——私は自分でそんなものを味わつていませんけれども——おそらく地上でいろいろ苦しんでいる靈が、

「助けてくれ！」

と云つて誰かにくつついて、そしてくつつかれた人は病気になつたりなんかする。ご浄靈とかいつて、何かやつたりしましょ。ああいうことは私は本当だと思ふんですよ。やはり、靈魂というのはそれなりに行くべき場所があるのであつて、地上のこの身体を脱ぎ捨てた時に、この靈魂というのは光の国へ行くか、闇の中をさ迷うか、つまり地獄へ落ちるか、これは大問題です。

終活というのがあるそうですね。就職活動の就活ではなくて、終わりの活動。つまり、自分が死んだあとどうなるかという、そういうことがあるそうですけれども。本当に大事なものは、この地上の身体を脱ぎ捨てたあと、必ず神さまの永遠の生命の光輝く愛の世界、そこに迎えられるという、その道筋をきちんとしていただいて、そこに必ず行けるといふ、その保証をいただく。これがいちばん大事ですよ、いろんな保険に入るよりもその保険が。

「保険料はいくらなんですか？」

「ただです」

「本当ですか。いや、ただとは信じられん」

「お金だしたい？ なんぼ出すの？」

「1千万？」

「あかん、あかん」

「1億？」

「あかん、あかん」

「じゃ、なんぼ？」



「引き替えができません」
と。私はそう思う。

天国へ行く道

キリストがご自分でちゃんと天国へ行く道をお創りくださった。

「我は道なり、真理なり、生命なり。誰にても我を通らないでは、父の御国に、
御許に行くことはできない」

と言われた。キリストご自身はもう永遠の生命そのもののお方です。祈っておれば、眩い姿にお変わりになるし。そして、サーツと行こうとすれば、もう天国へ行ってしまう。もししたら、我々は孤児ですよ。でも、キリストは弟子たちに言われましたね。

「私はあなた方を孤児にはしない。必ず向こうへ行つて、父の所に住処を見つけたら、また帰ってくる。天国は住宅難ではない。住処がたくさんある。それをちゃんとあなた方のために用意をして、用意ができたならまた帰ってくる」
と、ヨハネ伝14章に言っておられますものね。

「だから、神を信じ、私を信じなさい」
と、キリストはご親切に言っておられる。ご自分だけだったら、祈っていれば直ちにサーツと行ってしまう方。行つてしまつたら、あとは我々は置いてけぼりの、もう孤児でどうしようもない。亡くなれば土に葬られて、無縁仏かなんかしりませんが、そういう哀れな存在です。そういう哀れな存在を本当の天国の光の愛の世界に連れていくために、ご自分は何をなさつたか。我々のマイナスを全部ひつかぶられた。そうでしょ。

「私は立派な人間ですから、神さま、迎えてください」
と、そんなことを言えるのは誰もいないはずですよ。だいたい、自分が立派だと思ふこと自体がもうおかしいわけです。キリスト自身が、

「私は何ものでもなし」
と仰つた。ヨハネ伝5章のところ、

「父が、せよと仰ることを私はしているだけで、やるべきことはみなお示しになる。語れと仰る言葉をいただいて語っているだけで、私は自分からは何もできない」
と、ハッキリ言っておられる。

「父が私の中で御業を行つておられる」
と。そういう、神さま一切です。

「あなたの御意がすべてです」

と言つて、自分を預けきつて、信頼しきつてある姿が「義」なんです、聖書でいう「義」というのは。「義」という字は「羊の我」と書きます。羊というのは非常に従順だそうですね。我を貫かないで、羊飼いに自分を委ねていくという。



とにかく、義というのは、神の御意が貫かれている事態が義なんです。「義人」というのは、神の御意をそのまま受けとって、それに委ねていく在り方の人が義人です。義人というのは、イエス以外にはありません。みな自分が、エゴがありますから、エゴは必ず神さまの義と、神さまの聖と対立してしまふ。逆らってしまふ。水と油です。はじき飛ばされる。そういう存在をキリストは御存知だから、私たちが本当の天国人するために、自分が我々の業、不義、マイナス要因、それを全部ひつかぶってくださった。

だから、パウロは、

「われ主と共に十字架につけられたり。もはや、われ生くるにあらず。キリス

トわがうちにありて生き給うなり」

と、ガラテヤ書2章20節で言っています。

そのように、私たちは自分の中から本当の生命をプロデュース（産出）することはできません。むしろ、私たちが行くべき定めは、本来ならもう暗黒の世界しかないはずなんです。自分の中には光はありませんから、生命ありませんから。そうすると、わずか100年の自然の命が終わったら、それでヒリオード（終止符）。しかも、靈魂があるとしたら、その靈魂は決してそれ自体、光の国へ行くような要因を持っていない。そういう我々に対してキリストは、

「天国の本当の永遠の生命をあげよう」

と言って降^{くだ}ってきてくださった。しかも、それは父の御意^{みこころ}であった。

そのように考えますと、我々人間というのは本当に神さまによって生かされている存在です、在りて在らしめる神さまによって。

神の義と愛が「永遠の生命」

旧約聖書を読まれたら、よく、

「神さまは恐い、裁きの神さまだ、恐ろしい神さまだ」

と、そういうふう^{ふう}に誤解する方が多いようです。ルターも誤解していた。ルターも神の義の前に自分は罪びとという自覚でもう震えおののいて、ついに独房の中でぶつ倒れてしまった。それを誰かが見つけて救いあげて、やっと命に戻ったという、そのぐらいの凄^{すご}い体験をした。模範的な修道僧だったといわれています。そのルターが、

「自分は神の義の前には裁かれる存在でしかない」

といって、もの凄^{すご}く苦しんだ。ところが、あのローマ書3章のところに、

「神の義は福音のうちに顕れ、信仰より出でて信仰に進ましめる」

という言葉にぶつかって、神の義は審判の義で、人を地獄へ突き落とす義だと思っていたのが、

「神の義は福音のうちに顕れる」



という。福音というのはキリストの救いの音信でしょ。キリストの生命、愛、キリストの中に、キリストに係わるすべての音信おむすれ、これが福音です。その中に神の義が顕れているとはいったいどういうことかといつて、ルターはいろいろそこで悩んだ。そして、

「キリストを信ずる、キリストをいただくことによつて、すべて神の審判さばきの義が救いの義、愛に変貌する」

ということに気づいたんです。

私は、神さまの義というものの中には愛が潜んでいたと思う。審きながら、審きつぱなしではない、審きことによつて今度は、人を愛の生命に満たしめて天上へ連れていく。これが神さまの本当の姿だと思う。義の中に愛が隠されている。ところが、神の義が審判となつて人間にきますと、それで人間は吹っ飛んで、愛が働く余地がなくなってしまう。

ところが、キリストが神さまの審判の義をすっかり受けとつてくれた。ご自分が砕かれた。ご自分は地獄へ突き落とされた。それによつて神の義の審判は終わった。あとは隠された愛が顕れてきた。それが同時にまたキリストの中にあの永遠の生命が宿っていましたから、それがあのキリストの霊体となつて顕れてきた。復活という現象ですね。輝かしい姿で顕れてきた。それによつて今度は今までストップのかかつていた愛が、今度は100%に我々の中に入ってくるようになった。だから、審判の義はキリストがすっかり受けとめて、そして今度は隠されていた愛だけが100%に顕れてきた。

これがキリストが我々に下さる「永遠の生命」なんです。永遠の生命とは、ただのんびんだらりといつまでも生き続けるような、そういった時間的な長さではなくて、その質がいつまでも滅びない、輝き続ける、そして人を生かす愛である。こういう姿が本当の永遠の生命のすがただと私は受けとつています。それをまさにキリストが顕された。そして無条件に誰にでも与えようとなさつている。そういうものなんです。

そういった永遠の生命の世界というものは、我々の自分の哲学的な思考とか、そんなものでは出てこないと思う。キリストにぶつかるしかない。しかし、キリストにぶつかるにはまずやはり聖書にぶつかることが一番です。聖書という神の言葉、これが本当に生き活きと生きてくるときに初めて——その聖書の中のいくつかの言葉、特にキリストが語られた言葉の中にキリストの霊が宿っている。その言葉の中に宿っている霊をこつちがしっかりと受けとつたときに——こちらの中に永遠の生命が流れこんでくる。そんなふうに思います。

ですから、もしも、キリストを知らず、聖書も知らず、人間は単なる自分の考え、哲学の中だけで生きていたら、私は絶対に永遠の生命にあずかることは不可能だと思ふんです。よく、人間は、

「これだけの幸せな体験をしたから、もういつ死んでもいい。非常にいいことがある。つたら、もういつ死んでもいい」

なんて、そういうように言いますけれども、それは一時的には、

「いつ死んでもいい」



と思うかもしれないと思ふんですよ。そんな「いつ死んでもいい」なんて言いながら、やはり人間はそんな死んでそのまま終わってしまったくないと思ひますね。

でも、死んだあと、どこへ行くのか何も分からない人にとっては、この地上だけがすべてだったら、そのすべてである地上でできるだけ夢中になれるもの、熱中できるもの、情熱を燃やし続けることのできるもの、そういうものに自分を委ねたいと思うのが人情ではないかと思ひます。

まさに今、甲子園でやっているのがそれだと思ふ。甲子園でやっている球児たちは、本当に何たる熱情、何たる情熱か。あれくらい熱心に、皆さん、それぞれの仕事だとか、それぞれ自分がやりたいものに熱中したら、凄いいことになると思ふんですけれども。

私が業を全部引き受けた

永遠の生命のことを聖書の中でいちばん語っているのはヨハネ福音書だと思ひます。このヨハネは手紙も書いています。ヨハネの手紙のいちばん最初のところに、「命の言」という項目があつて、

「初めからあつたもの、わたしたちが聞いたもの、目で見たもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。――²この命は現れました。御父と共にあつたが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。――³わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。⁴わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。」（ヨハネの手紙一・1-14）

こんなことを冒頭に書いています。それから読んでもうちょっと読んでみましょう。「神は光」という小見出しがついていますが、

「⁵わたしたちがイエスから既に聞いていて、あなたがたに伝える知らせとは、神は光であり、神には闇が全くないということ。わたしたちが、神との交わりを持っていいと言ひながら、闇の中を歩むなら、それはうそをついているのであり、真理を行つてはいけません。⁷しかし、神が光の中におられるように、わたしたちが光の中を歩むなら、互いに交わりを持ち、御子イエスの血によってあらゆる罪から清められます。⁸自分に罪がないと言ひなら、自らを欺いており、真理はわたしたちの内にありません。⁹自分の罪を公に言ひ表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます。¹⁰罪を犯したことがないと言ひなら、それは神を



偽り者とすることであり、神の言葉はわたしたちの内にありません。」（ヨハネの手紙一1・5〜10）

こんなことを言っている。しかし、ここでも、「罪を犯す」とか、そういった何か人間の行動とか、人の思いとか、それを「罪」と言ってますけれども、本来は存在そのものが神さまに逆らっているというのが罪なんですよ。

「あれをした、これをした。どんな悪いことをした」

というのは枝葉の問題であって、本来、存在そのものが神さまとは相いれない存在です。悲しいです。悲しいけれども、そういう存在です。それが本当の罪なんです。

だから、これも存在そのものを否定していただくしか仕方がない。そういつて自分で自分の命を否定したらいけない。では、どうしたらいいんですかと。それでキリストは全部ひつかぶってくれた。キリストが全部ひつかぶった。あなた方は自分で自分の命をおそまつしてはいけません。

「私があなた方自身の中に巣くっていたその罪性、業、それを全部引き受けたから、あなた方はただひたすら生きてほしい。あなた方に本当に生命を与える。その生命は神の生命だ。神さまを第一にし、愛を第一にし、そして天上のレベル、天上の次元に生きていくような、そういう在り方をしてもらいたい。そのために私は全部、あなた方のマイナス要因を全部私がひつかぶる。これは父の御意だから、私は自分で十字架にかかる。だから、何も心配しないでいいよ」

と。これがキリストの愛というものなんです。そういつた、人間がいかに罪深いかということと言っているのがローマ書ですが、今日はその中味に深く入りこめないと思います。

死んだ後の行き先

永遠の生命のことを一番詳しく語っているのがヨハネの福音書ですので、これからヨハネの福音書を少し皆さんと一緒にたどつていこうと思います。

その前に、神さまは我々のことをどう思つてくださるのかということが、ルカによる福音書の12章4節から7節に出ています。つまり、人間は死んだらお終いかというと、

「そうじゃないよ。死んでからまだ行き先がある。地獄だったら大変だ。天国ならいいけれども、死んだあと地獄なら大変だ。悪魔、サタンという霊は、人間を存在としての肉なる、肉体なる人間を滅ぼすことはできても、霊魂を滅ぼすことは絶対できない。霊魂は神さまに守られているから大丈夫だよ」

と。そのことを言っているのがこのルカの福音書の言葉だと私は受けとっています。

「⁴友人であるあなたがたに言っておく、^{からだ}体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。」



自爆テロであろうと、何であろうと、あるいは自然現象としての大津波で命が流されようとも、そんなもので人間は滅びるようなものではない。あの大津波は本当にお気の毒で大変なことでしたけれども、しかし、私はあそこで犠牲になった方々は全部キリストによって救い出されている信じています。身体は滅びる。しかしながら、その方々の霊魂はキリストがサツと寄り添って全部救いあげてくださっている。もちろん、

「そんなものは要りません」

と言う人は別ですよ。「要りません」と言う人は別だけれども、すぐる人は全部天国へ引き上げられたと、私は信じています。そういつたことがここに出てくる。

体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。

⁵だれを恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持つている方だ。

これは神さまですね。

そうだ。言っておくが、この方を恐れなさい。⁶五羽の雀がニアサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、神がお忘れになるようなこととはない。⁷それどころか、あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

(ルカ12・4〜7)

ちよつと雀にはお気の毒なんですけれども——いや雀も可愛がつてやってください——ここで言われていることは、

「あなた方は本当に素晴らしい存在で、神さまが創造主であつて、神さまに創られた素晴らしい存在だから、そんな簡単に滅びるものではない。たとえ——この身体は仕方がない——身体はいろんなことで朽ち果てることがあつても、その中に宿っている霊魂は絶対に滅びない。これは永遠の生命の世界に私が連れていくんだから」

というのが隠されていると思うんです。

次は、ヨハネによる福音書の1章1節から5節。

「¹初めに言があつた。言は神と共にあつた。

この「言」はキリストのことなんです、霊なるキリストです。だから、

言は神であつた。²この言は、初めに神と共にあつた。³万物は言によつて成

つた。成つたもので、言によらずに成つたものは何一つなかつた。⁴言の内に

命があつた。命は人間を照らす光であつた。⁵光は暗闇の中で輝いている。暗

闇は光を理解しなかつた。」

と、こんな言葉がヨハネの冒頭に出てまいります。

それから次は、有名なニコデモという、ユダヤ人の議員でありかつ非常に素晴らしい学



者でもつあったニコデモという方との会話がここに引かれております。これも面白いのでちよつと読んでいきます。

「さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であつた。²ある夜、イエスのもとに来て言った。「ラビ、
「ラビ」というのは「先生」ということ、

わたしどもは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神が共におられるのでなければ、あなたのなさるようなしるしを、だれも行うことはできないからです。」

まさにその通りですね、

³イエスは答えて言われた。「はつきり言っておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」

「新たに生まれるとはどういうこと?」と、皆さんだつて、いきなり、イエスがここに顕れたら、

「ああ、イエスさま、あなたは素晴らしいお方です。神さまがご一緒だから、あなたの御業は素晴らしいです」

なんて言つて、仮に敬意を表したとする。その時に、

「ハッキリ言っておく。あなたは新たに生まれなければ神の国を見ることはできないよ」

と言われたら、

「そんなこと言われたつて、どうしようもありません」

と言つて、それこそドギマギするでしょうね。ニコデモさんも同じでした。

⁴ニコデモは言った。「年をとつた者が、どうして生まれることができるでしょうか。」⁵イエスはもう一度、母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。⁶イエスははお答えになつた。「はつきり言っておく。だれでも水と霊とによって生まれなければ、神の国に入ることはできない。⁶肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。」

我々は肉から生まれました。お母さんに産んでいただきました。オギャーといつて生まれてきた。自分は何もしない。赤ちゃんというのはすべてが備えられている。イエスの場合は馬小屋ですから気の毒でしたけれども、今の赤ちゃんは普通ならばすべてが備えられて、みんなから祝福されて育つていく。

それでニコデモは言いました。もう一回それをやるんですかと。それに対してイエスは、「そういう人間的な肉体の命としての誕生、これはそれだけだ。別次元の生命があるんだよ。霊から生まれるものは霊である」

と。別次元の生命にならないと、神さまの次元は霊の次元ですから。この現象界には現れ



ていますよ、現象界には現れていますけれども、現象界の中に神が宿っているわけではない。別次元の天の次元にいらっしやるその神の次元、その神の次元から降ってきたのがイエスですから、イエスの中には別次元がちゃんと宿っている。それがいろいろ活動して、いろんな御業が起こっているわけですよ。

イエスは二重国籍

だから、イエスという方は二重国籍ですよ。地上の国籍、地上の人という面をマリアさんからいただいたきながら、聖霊によって宿ったということによって、天の次元も同時に持つておられる。だから、天の次元ともツーカーの間柄です。地上のことはマリアさんから生まれたから、よくわかっていらっしやる。悲しみも喜びもみんなおわかりになる。まさに地上の人であり、肉の人の面を持ちながら、同時に天の次元をちゃんと身体の中に具有しておられる。だから、天と地のあいだで、地にありながらも天上に向かっていつも祈っておられるでしょ。

「父よ！」

と言って祈っておられますね。それから、

「人の子が昇り降りするのを見るよ」

というようなことがこのニコデモとの問答のあとで出てきます。そのように、地上の人として生まれていながら同時に、天の人という、天のレベルの生命を同時に宿して、そして天との間でツーカーの間柄でいらっしやる。これがイエスという方ですから、実に我々からしたらもう驚くほかないようなお方です。だから、

「⁶肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である。」

という。

⁷『あなたがたは新たに生まれねばならない』とあなたに言ったことに、驚いてはならない。風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。」

そうですね。風は、今はもう宇宙衛星とかで観測して、

「フィッツリッピンの方に台風が発生しました。それがどの方向に向かって日本にはいつ頃やってきます」

と言ってくれますけれども、この時代は無理ですよ。どこから風が生まれて吹いているのか、どこへ行くこうとしているのか解りません。けれども、木の葉が揺れる、風を感じる、それはハッキリわかる。

「風はおもいそのままに吹いている。音を聞いても、その風はどこから来てどこへ行くのか誰もわからない。霊から生まれるのもみなそういうものだ」



と。いつ生まれたの？ わかりません。どこへ行くの？ わかりませんと。

⁹するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえまじょうか」と言った。霊から生まれるとか、そういう話をされるものだから、「そんなことがどうしてありえまじょうか？」と言った。

¹⁰イエスは答えて言われた。「あなたはイスラエルの教師でありながら、こんなことが分からないのか。」「¹¹はつきり言っておく。わたしたちは知っていることを語り、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちの証しを受け入れない。」「¹²わたしが地上のことを話しても信じないとすれば、天上のことを話したところで、どうして信じるだろう。」「¹³天から降って来た者、即ち人の子のほかに、

キリストは「人の子」という表現で自分を表されました。

天に上った者はだれもない。」「¹⁴そして、モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられねばならない。

これは十字架のことです。青銅の蛇を仰いだ者はみな癒された。しかし、そうでない者は、蛇に咬まれてそのまま死んでしまったという故事がある。あのモーセは荒野で蛇を挙げた。蛇は呪いの象徴なんです。

「人の子も上げられなければなりません」

という、十字架に掛けられるということは呪いを受けるということ、神の呪いを受けるんです。それはガラテヤ書にちゃんと出てきてます。呪いを受けられた。だから、神さまから呪いを受けて、地獄に突き落とされる。それによって今度は、人は永遠の生命を受ける。そういうことをここで言われた。

¹⁵それは、信じる者が皆、人の子によって

十字架にかかったこの方によって、

永遠の命を得るためである。

そして続きまして、

¹⁶神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」「¹⁷神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」「

¹⁸御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。」「¹⁹光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。」「²⁰悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。」「²¹しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」「(ヨハネ3・1〜21)



「神さまは誰も審きたくないんだ。みな救われてほしいんだ」

と。だから、この御子をしつかり受けとる者、からだの中に受け入れる者、これはもう裁かれない。生命の世界に入れられる。しかしながら、それを拒絶する者——「信じない」というのはむしろ「拒絶する」といった方がいいですね——神さまが差し出しておられるプレゼントを、

「このイエス、このお方を受けとりなさいよ。このお方は永遠の生命の君だ。このお方を受けとりなさい」

といて、神さまが差し出してくれたプレゼントを、

「要りません」

といて断つたら、これはもう自分の中に生命がない、光もない。しかも、光も生命も断ってしまった。そしたら、もう行くところがないじゃないですか。それが審判なんです。拒絶すること自体がもう審判になってしまっている。

「神の独り子の名を信じていないからである」

と。独り子を受けようとしなからである。ここの「信ずる」というのはむしろ、

「からだで受けとる」

といた方がいい。ただ、身体の中に、体内に吸収する。そういう感じですが、「信ずる」というのは。とかく頭の中で信じるというふうに思われる方が多いんですけれども、そうではありません。聖書で「信ずる」というのは、

「からだの中に吸い込んでしまう、それと一つになる」

という感じです。

そして、人間というのはどうも光が嫌らしい。だいたい犯罪は夜、暗いところで起こりますよね。「歴史は夜つくられる」なんて、ろくなことないですよ。悪が暗躍するのは夜です。光がくると、朝になると、それはもう消えてしまいますから。そして、

「真理を行う者は光の方に来る」

と。これは、私は逆だと思う。光の方に来たら、真理を行うような人間になる。光に、キリストのところに来て、キリストをいただいた人は、その人が行うこと、その人の道は光であり、生命であり、真理である。キリストが、

「我は道なり、真理なり、生命なり」

と言われたように、

「キリストという生命を受けとった人、キリストという光をいただいた者、それが歩む道は生命であり、光であり、真理である」

と、そう私は思います。



選手はベンチのサインを見て走る

それから次は、ヨハネの解説ということでしょうね。

「³¹上から来られる方は、すべてのものの上におられる。地から出る者は地に属し、地に属する者として語る。天から来られる方は、すべてのものの上におられる。³²この方は、

イエスのことですね、

見たこと、聞いたことを証しされるが、だれもその証しを受け入れない。³³その証しを受け入れる者は、神が真実であることを確認したことになる。³⁴神がお遣わしになった方は、神の言葉を話される。神が、**霊**を
ご自分の霊を、

限りなくお与えになるからである。³⁵御父は御子を愛して、その手にすべてをゆだねられた。³⁶御子を信じる人は永遠の命を得ているが、御子に従わない者は、命にあずかることがないばかりか、神の怒り

これこそ本当の審判ですね、

がその上にとどまる。」(ヨハネ3:31-36)

ここに、

「御子を信じる人は永遠の命を得ている」

とあります。もういただいたら、その瞬間に生命に満たされ貫かれてしまうという。

次へ参ります。5章、これがさきほどから言っています、

「自分からは何もしない」

ということが書かれているところです。

「¹⁹そこで、イエスは彼らに言われた。「はつきり言っておく、子は、父のなさることを見なければ、自分からは何事もできない。父がなさることはなんでも、子もそのとおりにする。²⁰父は子を愛して、御自分のなさることをすべて子に示されるからである。」

父は子を通して御業みわざをなさっている。父は直接、ご自分でいろんな御業をなさらない。自然現象の雷が鳴ったり雨が降ったりというのはイエスと関係なく起こっているかもしれない。けれども、人の中における働き、人を癒したり救いあげたりというのは全部、御子イエスを通してなさっている。だから、代理店に例えるのはもったいなさすぎる。キリストは地上の本当に天国、天国者で、地上の生命そのものなんです。

神さまは高い次元のところにいるから、それは直接、我々人間に働きかけることができない。またもし直接に働きかけたら、我々はふつとんでしまうかもしれません。高圧電流に吹っ飛ばされるように。だから、キリストという方がしっかり父の御意を受けとって、そして自分の中で醸成して、人に解るようにいろいろ語ったり、さすったり、なだめたり、



いろんなことをして、我々を天国の世界に導いてくださる。そういった役目をしてくれたのがこのイエスというお方です。

また、これらのことよりも大きな業わざを子にお示しになって、あなたたちが驚くことになる。²¹すなわち、父が死者を復活させて命をお与えになるように、子も、与えたいと思う者に命を与える。²²また、父はだれをも裁かず、裁きは一切子に任せておられる。²³すべての人が、父を敬うように、子をも敬うようになるためである。子をお敬わない者は、子をお遣つかわしになった父をも敬わない。²⁴はつきり言っておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。

まだ十字架の前の段階でこんなことをハッキリ断言されているのは凄いですね。我々は今から見てますから、すべてのことがすんなり解るんですけども、このようなまだイエスが地上におられるときにこういうことを断言なさって、

「わたしの言葉を聞いて、それを根拠にして、この天上の神さまのことを信じる者は、もう既に永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている」

と。凄いですね。

²⁵はつきり言っておく。死んだ者が神の子の声を聞くときが来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。²⁶父は、御自身の内に命を持つておられるように、子にも自分の内に命を持つようにして下さったからである。²⁷また、裁きを行う権能を子にお与えになった。子は人の子(メシヤ、キリスト)だからである。²⁸驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、²⁹善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出てくるのだ。

³⁰わたしは自分では何もできない。ただ、父から聞くままに裁く。わたしの裁きは正しい。わたしは自分の意志ではなく、わたしをお遣わしになった方の御心(御意志)を行おうとするからである。

³¹もし、わたしが自分自身について証しをするなら、その証しは真実ではない。³²わたしについて証しをなさる方は別におられる。そして、その方がわたしについてなさる証しは真実であることを、わたしは知っている。³³あなたたちはヨハネのもとへ人を送ったが、彼は真理について証しをした。³⁴わたしは、人間による証しは受けない。しかし、あなたたちが救われるために、これら³⁵のことを言っておく。ヨハネは、燃えて輝くともし火であった。あなたたちは、しばらくの間、その光のもとで喜び楽しむとした。³⁶しかし、わたしに



はヨハネの証しにまさる証しがある。父がわたしに成し遂げるようにお与えになった業^{わざ}、つまり、わたしが行っている業そのものが、父がわたしをお遣^{つか}わしになったことを証ししている。³⁷また、わたしをお遣わしになった父が、わたしについて証しをしてくださる。

だから、イエスがなさった御業は全部、あれはイエスがなさったように見えるけれども、実はイエスを通して神さまが働いておられる。イエスが、

「癒えよ！」

と言われたら、それは神さまの「癒えよ！」というご命令なんです。そのようにイエスが発せられる言葉と神の御意、御言はピタツと一つ。合一している。これが不思議なことです。逆にいうと、神さまはそれだけイエスを信じておられる。全部、神さまが、

「やれ！ やることは全部示すから、やれ！」

と。野球でもよくベンチを見て、サインを見えますね。サインによって盗塁して走ったりする。走っているのは選手ですけれども、「走れ！」と言うのはベンチなんです。すべて同じように、天のベンチからイエスさまに命令がきて、サインがきて、それをキャッチしたらその通りに寸分の狂いなく、時間差がないんですよ、御業が現れていく。まあそんな情景を想ってください。いちいち上を向いて——野球選手はベンチを見て——イエスは上を見て走る。まあそんなふうな想像をしたいと思えますね。

聖書でドラマチックにイエスと向き合おう

それから、

あなたたちは、まだ父のお声を聞いたこともなければ、お姿を見たこともない。

³⁸また、あなたたちは、自分の内に父のお言葉をとどめていない。父がお遣わしになった者を、あなたたちは信じないからである。³⁹あなたたちは聖書の中に永遠の命があると考えて、聖書を研究している。ところが、聖書はわたしについて証しをするものだ。⁴⁰それなのに、あなたたちは、命を得るためにわたしのところへ来ようとしらない。」（ヨハネ5・19〜40）

これは現代でも当てはまることなんです。「聖書研究会」というのが一生懸命に聖書を研究なさっている。熱心なだけけれども、何のためにやっているの？ 聖書はキリストを描き出そうとしている。聖書という書かれた文字からイエス・キリストのお姿が立体的に現われて、その方と一つになる、その方にだっこしてもらおう。こっちも抱きつく、しがみつく。そして一つになる。これが目的ではないのと。それなのに、そのお方をのけておいて、一生懸命で聖書研究をやつて、

「いことこことは矛盾している。これはどっちが正しいのだろうか。これはアラム

語で言われていたのがギリシア語に翻訳されているから、どうだったのか」



なんて、いわゆる研究というのはそんなことをなさるみたいです。そんなをやって何になるのかと思う。他の文献ならいいですよ。でも、

「聖書は私(キリスト)のことを証言している。私は聖書の中から躍り上がって、ここに生きて働いているんだよ」

と。おもちゃの兵隊みたいですね、夜になると、寝たおもちゃが起き上がって、いろいろ楽隊を鳴らしたりして遊びまわるといふ。そのように、聖書という書かれた文字の中からイエスというお方が立体的に浮かびあがって、そして、あなたに迫ってきて、あなたに語りかけて、

「あなたと私は一つだよ。あなたに永遠の生命を与えたいんだよ。与えたよ」

「はい、ありがとう」

と。そういうドラマチックにイエスと向き合い、抱き合い、しがみつき、喜び合い、感謝してという、そういう生き方をしてこそ聖書を読んだということが言えるのに、それがなくて、

「あそこそこことは矛盾している。どっちが本当だろうか」

とか、そんなことを研究して何になるのかと思う。

小池辰雄という先生は、

「聖書はかけらだ。聖書は、これですべてなんて思ったらおかしい。これは本もの世界のごく一部で、氷山の一角だ。聖書はまだまだ書き足りなくてうめいている。

そのうめきを汲み取らないといかん。文字の奥を読みとらないといかんよ」

と言われた。つまり、行間を読めということ。それはキリストが仰っている、

「わが語りし言は靈なり、生命なり」(ヨハネ6・63)

ということ。また、

「儀文は殺し、靈は生かす」(コリント後3・6)

という言葉がコリント書にもあります。

文字にとらわれてはダメだ。文字の奥から迫ってくるもの、響いてくるもの、その響きを受けとり、生命を受けとっていく。そしてその世界に自分も躍り込んで行って、そこで生きていく。そういう読み方をしなかったら、何も読んだことにならない。

だから、読み始めたときと読み終わってからと、人相が変わってくる。読み終わったら、もう輝いている。そういう読み方をしないと、読んだことにならない。なぜならば、聖書を聞くことによつて、聖書の中に隠れていたイエスがピョクンと起き上がって、問答して、お互いハグしあつて、そして

「一緒に生きようよ」

と。そういう世界を与えてくれるのがこの聖書なんです。だから、聖書に対する観念を、皆さん、変えていただかないといけない。



「聖書は我につきて証^{あかし}するものなり」(ヨハネ5・39)
と。ヨハネ伝の20章の終わりにも書いてある、

「この聖書はこれによつてあなた方が生命を受けとるために、これは書かれて
いるんですよ」(ヨハネ20・31)

と。復活してトマスに現れたりなされた。トマスは、八日前にイエスが現れた時に自分が
そこにいなかったものだから、弟子たちが、

「イエスを見た、イエスを見た」
と言つても、

「そんなバカなことはない。自分で実際にその傷跡に触つて指を突つ込んでみない
と俺は絶対に信じないよ」

と否定して、非常に現代人みたいなことを言った。八日後にイエスが現れた。そして、真
ん中に立つて、

「さあ、トマスよ、指を突つ込んでみたかったら突つ込んでごらん。触つてご
らん」

と。トマスは、
「申し訳ありません！」

と平伏したわけです。平謝りです。その時に、

「²⁹イエスはトマスに言われた。私を見たから信じたのか。見ないのに信じる
人は幸いである。」(ヨハネ20・29)

と。更に続いて、

「³⁰このほかに、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなされたが、そ
れはこの書物に書かれていない。³¹これらのことが書かれたのは、あなたがた
が、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエス
の名により命を受けるためである。」(ヨハネ20・30、31)

と。つまり、ヨハネの福音書というのは、

「あなた方、読者が永遠の生命を、この復活されたイエス、霊界におられるイエス、
天界から今も働いておられるイエス、このお方をからだに受けとつて、そしてこ
の永遠の生命をいただいた人間として生きていく、そのためにこのヨハネ福音書
は書かれたんですよ」

ということが書かれている。ですから、その角度から読んでいく必要があるわけです。だ
から、

「研究ではないよ。生命を得るためには私のところへいらつしやい」
と、そういうことを言われた。



しるしの奥に隠されているもの

では、その次へまいります。ヨハネ伝6章、「命のパン」。これはパンの奇蹟をなされた。五つの大麦パンと二匹の魚を少年が持つていて、それをさしだした。イエスはそれを受けとって天上にかかげて祝福して、それからパンを裂いていかれると、男だけで五千人いた人たちがみんな食べあきて、しかも残ったパンくずを集めてみたら十二の籠に満ちたという実に不思議なお話が出てます。それを味わった人たちは、

「このお方を捕まえておいたらもうパン問題は解決だ」

と。厚生労働省の大臣にしようと、農水省の大臣にできるといふことで追っかけて来たわけです。その時にイエスは答えられた。

「²⁶イエスは答えて言われた。「はつきり言っておく。あなたがたがわたしを捜

しているのは、しるしを見たからではなく、

「しるし」というのは、現象を通してその奥にある何か、奥に隠されているものを会得する、そのための手段が徴しるしなんです。だから、五つのパンと二匹の魚であれだけのことなきつた。それをもつていったい神さまは何を示そうしておられるのか。それをしっかり受けとらないで、「ああ、パンがよかった。パンがおいしかった。これからもパンをください」と、それでは何にもならないよということをここで言われた。

パンを食べて満腹したからだ。²⁷朽ちる食べ物のためではなく、いつまでも無

くならないで、永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の

子があなたがたに与える食べ物である。父である神が、人の子を認証された

からである。」²⁸そこで彼らが、「神の業わざを行うためには、何をしたらよいでし

ようか」と言うと、²⁹イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を

信じること、

このイエスを信じること、イエスを体受すること、からだで受けとること、イエスと一つになること、

それが神の業である。」

それは実は神さまにしかできないんだよと。人間は簡単に「信じます」とか言うけれども、そんな人間が「信じるの、信じないの」なんていうのは大したことではない。明日になったら、錯覚だったと思うかもしれない。そうではなくて、神さまが信ぜしめてくださる。別な言葉でいうと、イエスご自身が私たちのからだの中に入ってください。

「お前と私は一つだよ」

と、イエスの方から言ってください。

「はいっ、わかりました。それでいきますー!」

と。こうでない。私が主体で信じたなら、今度は、私が主体で信じないかもしれない。人間主体でやっていることは危ない。そうではなくて、神さまの方が主体になって、私を



ガツと捕まえて、

「もうお前を絶対離さない、もうお前に生命を与えた、さあこれから一緒に行くんだ、いいね」

「はい、もちろんです！」

と。これですよ、我々の生き方というのは。自分ではないんですよ。すべては神さまの方の思し召しです。イエスは神の思し召しのままに動いた。今度は、私たちはキリストの思し召しのままに生かしていただく。それは、

「あなた方は無限無量に生きろ、本当の生命に生きろ、愛に生きろ、生命にあふれて生きろ」

という、そういうことなんですから。

「神がお遣わしになった方をからだで受けとること、これが神の業だ、神さましかできない業だ」

という。

今が終わりの日

それから数行とんで、

³²すると、イエスは言われた。「はっきり言っておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではなく、わたしの父が天からのまことのパンをお与えになる。

あれを通して実はまことのパンの——荒野でマナが降ってきて、イスラエルの民がそれで一応、食糧不足を助けられたということがありましたが——あれは徴に過ぎないと。

³³神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」

あのパンを食べた者も皆死んでしまった。あれは一時的なものだった。しかしながら、私というパンを食べる者は死なない。永遠の生命者だと。

³⁴そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつも私たちにください。」と言うと、

³⁵イエスは言われた。「わたしが命のパンである。わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決して渴くことがない。³⁶しかし

前にも言ったように。あなたがたはわたしを見てゐるのに、信じない。³⁷父が私にお与えになる人は皆、わたしのところへ来る。わたしのもとに来る人を、

わたしは決して追い出さない。³⁸わたしが天から降^{くだ}ってきたのは、自分の意志を行うためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためである。

³⁹わたしをお遣わしになった方の御心とは、わたしに与えて下さった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。⁴⁰わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わ



の日に復活させることだからである。」(ヨハネ6・26〜40)

さかんに「終わりの日」というのが出てくる。でも、「終わりの日」というのは、いつ来るかわからない最後の審判の時ではありません。私にとっては、終わりの日は今なんです。常に今日、現在、今が終わりの日なんです。

今を生きないで、いつ生きるんですか。今、永遠の生命をいただいて、今、生命にあふれて生きる。それが積み重なって、あるいは将来の最後の審判の時まで至るのか、その前に天上に迎えられるのか、わかりません。いつそんな終わりがくるかわかりません。そうではなくて、常に現在なんです。今なんです。今、現に永遠の生命であるイエスをいただいて、その方に一つになっていただいて、一如の姿で、ちょうどキリストが、

「父と私は一つである」

と言われたように、今度は私たちが、

「イエスと私は一つである。私の中にイエスが生きておられる。だから、イエスと

私は一つである」

と大胆に告白する。

「見えない霊なるイエスと、私の霊、霊的人格が一つになっている。外側は普通の人間に見えても、内側はちがうお方が宿っておられる。私はイエスと一つである。そして、永遠の生命である。永遠の生命者で現にある。私は死んでも死なないよ」

と。こうやって皆さんは宣言できるんです。それを宣言することを信仰といいます。

「人は心に信じて義とされ、口に告白して救われるからである」(ロマ10・10)

なんて、ローマ書に出てきますけれども。受けとったものをハッキリ宣言していく。それで確認になる。

「いや、まだちょっと、人に言うにはまだまだ未成熟で……」

なんて、そんなことを思ったらいかんですよ。いただいたものは、

「いただきました!」

と言って、直ちに発信するわけです。誰も聞いてくれなかったらしょうがないけれども。

そのくらの、常に現在なんです。そのうちにいつかではない。常に今なんです。皆さん、今なんです、今日なんです。今日、この福音の言葉は、イエスの言葉は——私はスピーカーにすぎません——私を通してイエスが語っておられる。その言葉をしっかりと、

「はい、いただきます!」

と言っていただかれたら、もう皆さんは変貌されるわけです。それだけの力があるんです。イエスの御言には、イエスの霊には。そういうふうな思いで受けとってくださいね。それが御意だということですよ。

「終わりの日に復活させる」

というのは、



「いや、今が終わりの日です。復活の生命、あの永遠の生命、これをいただきました、ありがとうございます!」

と、そうやって祈るんです。

霊の生命

そんなことを言われたので、今度はユダヤ人たちがいろいろ問答をしています。「何を言っているんだろうか」なんて。

「41ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から降ってきたパンである」と言われたので、イエスのこととつぶやき始め、⁴²こう言った。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降ってきた』などというのか。」⁴³イエスは答えて言われた。「つぶやき合うのはやめなさい。⁴⁴わたしをお遣わしになった父が引き寄せてください。さらなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない。そうなんです。私たちはとかく、

「自分でイエスを選んで、自分でイエスを信じた、そして、自分の信じたことによつて救われる」

と思う。

「信仰によつて救われる」

と書いてあるからといって、いつも

「自分、自分、自分」

というふうにいるがちです。しかし、ちがうんです。イエスの方から現れてきて、イエスの方が捕まえて、私たちの心を向けさせて、そして受けとらせて、

「イエスキさまによつて救われました、イエスキさまを信じました」

と言わせる。主観では自分が信じたように思っているけれども、実は向こうからの促し^{うなが}があつて、それに促されて気がついたということ、それが私は本当だと思えます。だから、ゆるがないんですよ。自分が主體的に信じたのなら、いつでも自分が主體的に棄てますよ。でも、向こうさんが主体で、私たちを捕まえて変貌させたら、これは変わりようがありませんね。ひたすらそのお方に身をゆだねて、

「どうぞ、よろしく願います」

と。そういうことではないでしょうか。「どうぞよろしく願います」と。朝起きたら、

「朝、目覚めることができました。ありがとうございます。今日一日もどうぞよろしく願います」

と。それ以外にないじゃないですか。寝るときには、

「どうぞ、今日、安らかに眠らしてください——ただし永遠の眠りではないですよ



——朝が来たら目覚めさせてください」
と祈る。

わたしはその人を終わりの日に復活させる。⁴⁵預言者の書に『彼らは皆、神によつて教えられる』と書いてある。父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとの来る。⁴⁶父を見た者は一人もない、神のもとから来た者だけが父を見たのである。⁴⁷はつきり言っておく。信じる者は永遠の命を得ている。⁴⁸わたしは命のパンである。⁴⁹あなたたちの先祖は荒野でマンナを食べたが、死んでしまった。⁵⁰しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。⁵¹わたしは、天から降ってきた生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」

要するに、

「私を食べる、私を飲む」

とか、そういう表現で仰るから、みんな、人は直接にそれをとってしまつて、

「これは人食い人種じゃないか、これはまこと聞いておれん言葉だ」

とかいつて、離れて行つたということがここに出てくる。そのくらいに烈しい言葉で仰つたということです。

⁵²それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。⁵³イエスは言われた。「はつきり言っておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。⁵⁴わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を復活させる。⁵⁵わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。⁵⁶わたしの肉を食べ、わたしの血を飲むものは、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。

これです。我々はキリストの中に抱か^{いた}れてある。キリストもまた私の中に宿つてくださっている。このお互いに抱き合い、抱かれ合うという、そういうふうな関係、一体関係、それが大事なんです。

⁵⁷生きておられる父が私をお遣わしになり、またわたしが父によつて生きるよ
うに、わたしを食べる者もわたしによつて生きる。⁵⁸これは天から降つてきた
パンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパ
ンを食べる者は永遠に生きる。⁵⁹これらは、イエスがカファルナウムの会堂
で教えていたとき話されたことである。」(ヨハネ6・41〜59)

「食べる」とか「飲む」というのは身体の中に吸収することです。だから、外側から見て信じているとか、そんなのではなくて、本当にからだごと吸収して一つになろうとする。食



物は形を変えて血肉となる。そのような形で、

「私という生命のパン、まことの飲み物、それをあなた方自身のものにしろ、一つになろうよ」

と、そういうイエスの熱のこもった言葉だと思えます。ところが、人々は、「ひどい言葉だ」と言っている。弟子たちでもそう。

「⁶⁰ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。「実にひどい話だ。

だが、こんな話を聞いていられようか。」⁶¹イエスは、弟子たちがこのことについてつぶやいているのに気づいて言われた。「あなたがたはこのことにつ

まずくのか。⁶²それでは、人の子がもとした所に上るのを見るならば：

∴。命を与えるのは「**霊**」である。肉は何の役にも立たない。わたしがあ

なたがたに話した言葉は**霊**であり、**命**である。」(ヨハネ6・60〜63)

ここで言っています「肉」というのは、自然的な私たちのヒューマンネイチャー(人間性)です。自然的な人間存在として生まれてきた。その人間存在そのもの、この全体を「肉」というといたしますと、これは永遠の生命の世界とは直接関わりをもてないんです、肉は。自然的な存在としての人間はそのままの姿では——この永遠の生命の世界は**霊**の世界でしょ、神さまの天の次元です——この天の次元をいただくには、自然的な人間存在はどんなにがんばっても、逆立ちしても、ダメなんです。

ただ**霊**をいただくしかない。生命を与えるのは**霊**である。この神さまの**霊**。イエスご自身が**聖霊**という姿で、**霊**なるイエスが私たちの中に宿ってくださいるときに、私たちの**靈魂**と合体してくださるときに、私たちは**生命**ある存在となる。もう外なる人は滅びても、内なる人は日々新たにされていく。これなんです。私たちはどうせみな外側はポロポロになって無くなります。ポロポロになって無くなり終わった時——それは死ですね——その時に無くならないものがちゃんとそこに育っているか。それが大事なんです。それが、皆さん、育っているか、育っていないか。これを育ててくださいよ。

光輝高靈者

若い時に育てる人はもの凄く幸せです。私は24歳でイエスさまに拾われて、もう60年経とうとしてますから、凄く幸せな人間なんです。それは悲しいこと苦しいこといろいろありますよ。ありますけれども、それらを乗り越えていつも輝き続けていくことができます。つまり、永遠の質をいただいていますから、滅びないですよ、内なるものは。滅びないです。ますます歳と共に輝いていく。これが本来の在り方なんです。けれども、それを受けとつてない人はやはり衰えますよね。これが本来の人間の肉なる人の在り方でしょ。ところが、**霊**なる存在は、

「外なるものは破るれど、内なる人は**日毎**に**新た**なり。見えるものは**一時的**で



あり、見えないものは永遠に続くのである」（コリント後4・16）

と、コリント後書に出てきます。そういう者に、皆さん、される。これが光輝高霊者の特権なんです。光輝く高い霊の存在者、そういうふうを受けとればいい。光輝く高霊——高次元の霊、天の霊、キリストの霊——をいただいた存在者。光輝く高次元の御霊の生命、霊をいただいた存在者。永遠の存在者は絶対滅びない。

いや、本当に皆さん、これは作り話ではない。それがリアリティです。それだけ言いたいんですよ、皆さんに。この世の中のもの全部過ぎ去っていきます。無常観がただよいいます。みな過ぎ去ります。でも、過ぎ去らないもの、時間によって影響を受けないもの、時間を超越して、なお光輝き続けるもの、不滅なるもの、それが永遠なんです、永遠の存在者です。それは本来、神さまだけだったんです。人間はもう滅びゆく存在だった。その滅びゆく存在者の中に、滅びゆかないものを持つてきてくれた。これがイエスという方で、そのために代価を払ってくれたのが十字架でしょ。十字架という、あの代価を払ってくださって、ご自分は地獄のどん底まで突き落とされて、地獄に居る者たちをも救いあげて、そして三日目に素晴らしい霊体となって現れて輝かれた。山上の変貌の姿そのままの姿で現れてくださった。そして、天に昇っていかれた。

今度は、天上からご自分の霊を送りこんで、私たちをみな同質のものに変えてくださる。同質なんですよ、質が永遠の質。天上の質をもった一人びとりにもう変えてくださっているんです。これは御業、神の業なんです。だから、皆さんが今日このお話をお聴きになつて——聖書自身がそれを証言しています——それを、

「然り、はい、そのとおり。いただきます。今までそんなものは知りませんでした。知らなかつたけれども、今日、いただきました。もう私は永遠の存在者なんです。あなたと一緒になんです。」

「そうだよ」

と。イエスという方はご自分の中にある善きものを全部与えようとなさっている。自分と同質のものに変えようとなさっている。私はそう思っています。

「私を見た者は父を見たのである。父と私は一つである」
と言われた。それで私は、

「私を見た人はキリストを見たんです。私の中に宿っておられるイエスという方を見たいですよ。私とイエスさまはいつも一緒なんです。いつも一緒に歩いていきますから。もう古い私は十字架で片づけられていますから。『われ主と共に十字架につけられたり、もはや、われ生くるにあらず』と。イエス・キリスト、復活された聖霊なるキリストが私の中で生きて働いてくださっている。そのお方と一緒に二人三脚で歩いています」

と。そういう存在者なんです。だから、私はあと何年地上にいるか知りませんけれども、



そのあいだ輝き続けますし、輝き続けて、そして期が満ちたら、サーツと向こうへ招かれて、翼をいただいで向こうへ昇つていきますから。

「さよなら、(あなた方がこっちに) 来たら迎えるよ、しばらくだったね」

と言って。それが我々の地上のお別れ。だから、私は、クリスチャンの葬式は明るくないとおかしいと思っている。輝く世界に招かれて、迎えられて行くんです。向こうからは、

「地上でのあなたの役割は終わった。さあ、おいで。永い間、ご苦労さんでした、

さあおいで。みんな待っているよ」

と。地上の人はまた私に、

「またいつか逢おうね」

と。こっちもまた地上の人に、

「待っているよ、皆さんの来るのを待っているよ」

と。そういう滅びない光輝く世界がある。それを神さまはキリストというお方を通して我々に与えてくれる。

お釈迦さんの世界は、私は知りません、経験していないから。お釈迦さんの世界も静かな光輝く世界だと思っけれども、これだけハッキリした大希望を与えてくださっているんだらうか。しかも、聖書は我々に分かりやすい言葉で書かれていますよね。私たちは、お経を読んでいるのを聞いても解りません。お葬式に行つたつて、お経を読んでおられるけれども、何も解りませんものね。やはり私たちは解る言葉で語ってほしい。

「ああ、そうそう、アーメン、アーメン」

と。「アーメン」というのは「そうです、そうです」ということを向こうでは「アーメン」というだけのはなしです。

「そうだ、そうだ、その通り」

と、そうやって響き合えるようなところでない、我々は困りますものね。

よくもまあこうやって、聖書を日本語に翻訳してくださったと思う。私たちにいきなり、「ギリシア語を読め、ヘブライ語を読め」なんて言われたら、お手上げですもの。昔の人はラテン語ですから、ラテン語で司祭さんとかがみな称えられているので、みんな解らない。それをルターが初めて母国語に、ドイツ語に翻訳した。そこから始まっていった。我々は、ありがたいことにこういう訳をいただいていますから、これを文字の奥にまで見透していくような読み方をしたいですね。

石をとり除けよ

次はヨハネ伝10章の「イエスは良い羊飼いのところ。

「私は羊の門だ」

ということをずっと言われて、



「¹⁴わたしは良い羊飼いです。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。¹⁵それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊のために命を捨てる。¹⁶わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼いに導かれ、一つの群れとなる。¹⁷わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、父はわたしを愛してください。¹⁸だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたしは自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。これは、わたしが父から受けた掟^{おきて}である。」(ヨハネ10・14～18)

「掟である」は「定めである」と言った方がいいと思います。運命であると。それから、10章25節から、

「²⁵イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業^{わざ}が、わたしについて証しをしている。²⁶しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊でないからである。²⁷わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う、²⁸わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。²⁹わたしの父が私に下さったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。³⁰わたしと父とは一つである。」(ヨハネ10・25～30)

それから次は11章、ラザロの復活のところですが、もうラザロは墓に葬られて四日も経っていた。マリヤ、マルタという姉妹はそれで本当に泣いていたわけです。ところが、イエスが来られたよというので、まずマルタがイエスの所へ走って行きます。そして、

「²¹もしも、イエスキさま、あなたがそばにいてくださったら、ラザロは死なないです。今ごろおいでになっても遅いですよ。」

と思いつつ、「しかし」と言います。
「²¹マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。²²しかし、あなたが神にお願いになることはなんでも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」

これは大したもんです。

²³イエスが、「あなたの兄弟は復活する」と言われると、²⁴マルタは、「終わりの日の復活の時に復活することは存じております。」と言った。²⁵イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きることができる。²⁶生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。この



ことを信じるか。」²⁷マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」（ヨハネ11：21～27）

だから、当時の宗教の教えによって、みな信心深い人は、終わりの時の復活は信じている。でも、現世において今この目の前で、地上でそんな復活の生命に生きる、復活の生命をいただくなんて思いもよらないことだった。だから、

「あなたさえそばに居てくだされば、ラザロは死なないですんだ。もう死んでしまつたらしょうがないじゃないですか。でも、あなたが祈ってくださいれば叶えてくださると、私は思いますから、なんとかかしてちょうだい」

と、そんな気持だったんでしょか。そうしたら、

「あなたの兄弟は復活する」

と。ここでの「復活する」というのは、もう一度、命よみがえに甦るということで、永遠の生命ではありません。

「ラザロはラザロの元の元気な姿のラザロに甦るよ」

と仰った。復活すると言われるので、

「はい、終わりのときの復活は知っています。けれども、今なんて、そんなことはとても私にはわかりません」

と言う。それに対して、

「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことがない。このことを信じるか。」

と仰った。そして、現にラザロの墓の前で、

「³⁹石をとり除けなさい」

と。人々が石をとり除けると、お祈りになって、

「⁴²父よ、私の祈りを聞いてくださったことを感謝いたします。かく申しますのは、まわりの人があなたを信じるようになるためです」

こう祈って、それから、

「⁴³ラザロよ、出てこい！」

と言われたら、ラザロは出てきた。あの

「石を除けなさい」

というのは非常に象徴的だと思う。我々も自分の心の前に石を置いて、墓の奥にあるような自分の霊を墓の奥へ押し込んでいたらダメだ。まず、邪魔ものをとり除けて、

「主よ、働いてください」

というような気持でおるときに、「ラザロよ、出てこい」という御声と一緒に、私の中の生命がポーンと出てくるという、そんな感じを受ける。だから、自分たちの中から妨げにな



るものを、まず自分の手で除けられるものは除いて、そして、

「イエスよ、働いてください」

と。そしたら、イエスの御言が私たちを生かしてくれる。そんなことを思うんです。

鴨川温泉キリストの湯

次の「人の子は上げられる」の真ん中あたりに、

「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう。」(ヨハネ12・32)

ということをやっています。それから一番終わりのところに、

「光のあるうちに歩きなさい。暗闇の中を歩く者は、自分がどこへ行くのか分からぬ。光の子となるために、光のあるうちに、光を信じなさい。」(ヨハネ12・35～36)

イエスという方が地上におられる間に、このイエスを信じないと、もうイエスは姿が見えなくなるのだから、そしたらもうどうしようもなくなくなるよと、そんなことを言われた。

それから、ヨハネ伝17章1～3節、これが最も大事なところですね。

「イエスはこれらのことを話してから、天を仰いで言われた。「父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。あなたの子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために、子はあなたからゆだねられた人すべてに、永遠の命を与えることができるのです。永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」(ヨハネ17・1～3)

「永遠の生命」とは何か。どうすれば永遠の生命者でおられるか。それは神さまと——イエスをお遣わしになった、イエスが父と呼んでおられたあの神さま——そしてその神さまの名代として降ってきてくださったイエス、そのお方を知る——これは知識ではありません——からだで知る、その方と一つになる、その方と合体する。それが実は永遠の生命への道ですと。

「永遠の生命を生きる」とは、そういうキリストと一如一体となって生きていくこと。キリストと一体となったら、キリストの中に充滿しているのは神さまですから、神さまの生命はキリストの中に充滿してますから、そのキリストさまに抱かれ、その中に我々自身が吸収されて、本当に一如一体となる。

「私を食べる、私を飲む」

と言われたように、本当に血肉とし、一つとなって生きていく。

「イエスという方と一つとなって一緒に生きていく。それが永遠の生命だよ、そう



「いう生き方が永遠の生命だよ」

と。非常に単純なんです。難しい研究なんか何もいりません。

我々は太陽の光を浴びる時には外に出ればいい。太陽の光が照っている所に行けば、太陽の光が私を温めてくれます。私はお風呂が好きです。寒い時でも湯船につかりますと、じわりじわりとお湯がからだの中にしみ込んでくる感じがする。自分のからだは冷たいけれども、温かいお湯がじわりじわりと本当に気持ちよく温めてくれて、そこでフーッとこのまま天国ではなかるうかというふうな、そういう味を味わせてくれるのがお風呂ですね。日本人はお風呂が好きでしょ。

私は自分たちの集会所を——この鴨川の丸太町の近くにあるけれども——

「鴨川温泉キリストの湯」

と名付けているんです。疲れた人はここへ来て休んでください。湯船につかってください。そうしたら、生命をいただけますよと。

「疲れている人はみないらっしゃい。私が休ませてあげよう」とキリストは言われましたね。

「すべて労する者、重荷を負う者、我にきたれ。我なんじを休ません」

と言われたから、それにはやはり温泉につかってもらわないといかん。「鴨川温泉キリストの湯」、これが京都キリスト召団の別名です。今度は皆さんご自身が「鴨川温泉キリストの湯」になって、いろんな人に対してこの温泉の温かみ、生命を流してあげるといいう、そういう使命をいただくこととなります。

キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きる

ローマの信徒への手紙の5章のところでは、

「³……わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、⁴忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。⁵希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」

「聖霊」というのはキリストの霊のことです。

8……わたしたちがまた罪人つみびとであったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。⁹それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。¹⁰敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。¹¹それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を



誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。」(ロマ5・3～11)

それから次のところでは、アダムの話がでてきて、アダムは人間のひな型であった。このアダムが神に背いたということによって、罪が人類を支配し、そして

「罪の払う報酬は死」

ですから、死が全人類を支配することになってしまった。けれども、一人の人イエスというこの人の義のおかげで、今度は万人が生命にあずかることになったのだと。

「¹⁸……一人の罪によってすべての人に有罪の判決が下されたように、一人の正しい行為によって、すべての人が義とされて命を得ることになったのです。」(ロマ5・18)

「²⁰律法が入り込んできたのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいつそう満ちあふれました。²¹こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです。」(ロマ5・20～21)

それから次の6章のところ、

「³……キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けたわたしたちが皆、またその死にあずかるために洗礼を受けたことを。」

昔のバプテスマは水の中に全身を浸すという儀式でしたから、全身を浸すことによって死を表した。水から上がるときには新しい生命に甦るといふ、それを象徴していた。そういうことをここで言っています。

⁴わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものになりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命にいきるためなのです。⁵もし、わたしたちがキリストと一体になってその死の姿にあやかるとすれば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。⁶わたしたちの古い自分がキリストと共に十字架につけられたのは、罪に支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にならないためであると知っています。⁷死んだ者は、罪から解放されています。⁸わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。

キリストに在る者は絶対死なないと。

「このように、あなたがたも自分は罪に対して死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、神に対して生きているのだと考えなさい。」(ロマ6・3～11)



わたしたちの本国は天にある

コリントの信徒への手紙二の4章16～18節、

「¹⁶だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」(肉体)は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」(霊なる人)は日々新たにされていきます。¹⁷わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。¹⁸わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」(コリント二4・16～18)

次はパウロのフィリピの信徒への手紙3章18～21節、これはパウロの願い、祈りを言っています。

「¹⁸何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。¹⁹彼らの行き着く所は滅びです。彼らは腹を神とし、恥ずべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。²⁰しかし、わたしたちの本国(国籍)は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。²¹キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」(ピリピ3・18～21)

これは凄い我々の希望ですよ。あのキリストのご復活の栄光のからだ、それと同じからだに私たちも変えられる。そういう体^{からだ}をいただく。霊だけが裸ではない。必ず体を与えられ、また翼を与えられる。そういう希望があります。

コロサイの信徒への手紙でも同じことを言っています。3章1～4節、

「¹さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。²上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないうようにしなさい。³あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。

見えないけれども、隠されている、実在しているんですよ。

⁴あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。」(コロサイ3・1～4)

私たちもキリストの栄光の姿と同じ姿になって現れてくる。その時がやってくると。

それから、ヘブライ人への手紙13章8節、

「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。」(ヘブル13・8)

そういう言葉があります。



それから最後は、コリントの信徒への手紙一の13章。これはパウロがたとえどんな奇蹟的なことをやっても、そんなものほもしも愛がなかったら無きに等しいと。そういうことを言っている。

「⁴愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。⁵礼を失せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。⁶不義を喜ばずして、真実を喜ぶ。すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。」
これです、

「愛はすべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」

これは我々においては、聖霊というお方、キリストが聖霊という姿で宿ってくださいっていると、これができる。自分の力ではできません。けれども、聖霊というキリストが我々の中に宿ってくださいるならば、「すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える」。今、目の前に見えているものの奥にあるものを見ているからなんです。今は暗い、今はつらい。でも、その奥に本当の光が輝いている。常にその奥にあるもの、見えないもの、それを我々は見つめて、信じて、そして耐えていく。そういうことなんです。

戦後、シベリヤで酷い目にあわれた同胞の方々は、なかで生き延びた方はこれを信じておられた方だと聞きました。やはり、今はこんな酷い逆境の中でもう生きるか死ぬか、仮死的な状態にいるけれども、イエスの生命は私の中に宿っていると。

「我々はすべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐えていくんだ」

という御言によって支えられ励まし合った人たちが生き延びたと、こう聞いています。

霊の体が復活する

それからもう少し読んでいきます。

⁸愛は決して滅びない。預言はすた廃れ、異言はやみ、知識は廃れよう。⁹わたしたちの知識は一部分、預言も一部分だから。¹⁰完全なものが来たときには、部分的なものは廃れよう。¹¹幼子わかだったとき、わたしは幼子のように話し、幼子のように思い、幼子のように考えていた。成人した今、幼子のことを棄てた。¹²わたしたちは、今、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今、一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。

神さまの側は、私たちのことはハッキリ知っておられる。でも、私たちの方からは、神さまのことはハッキリわからない。しかし、そのときにはハッキリ知るようになる。

¹³それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中でも最も大いなるものは、愛である。」(コリント一13・4～13)



それから、復活のことを言っているくだりです。15章42〜58節、

「⁴²死者の復活もこれと同じです。時^まかれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、⁴³時^まかれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、時^まかれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。⁴⁴つまり、自然の命が体に蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。⁴⁵「最初の人アダムは命のある生き物になった」と書いてありますが、最後のアダムは命を与える霊となったのです。」

「最後のアダム」というのはキリストのことです。

⁴⁶最初に霊の体があったわけではありません。自然の命の体があり、次いで霊の体があるのです。⁴⁷最初の人⁴⁸は土ででき、地に属する者であり、第二の人は天に属する者です。⁴⁸土からできた者たちはすべて、土からできたその人に等しく、天に属する者たちはすべて、天に属するその人に等しいのです。⁴⁹わたしたちは、土からできたその人に似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです。

「天に属するその人」とはキリストのことです。そういうふうになると。

⁵⁰兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。⁵¹わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにはです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。⁵³この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。⁵⁴この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。

「死は勝利にのみ込まれた。⁵⁵死よ、お前の勝利はどこにあるのか。死よ、お前のとげはどこにあるのか。」

そういうわけだから、私たちは地上でいろいろ苦しいことがあったり、地上での人の別れがあったりしても、断じてそれでへこたれてはいけません。我々にはもう既に永遠の生命が与えられているんだから。それをしっかり信じて、日々の業をしっかりとやっていこうという。

⁵⁸……こういうわけですから、動かされないようにしっかりと立ち、主の業^{わざ}に励みなさい。主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを、あなたがたは知っていますはずです。」(コリント一15:42〜58)

イエスが、またこの聖書が、あるいは使徒たちが私たちに語り告げてくださっていることは、永遠の生命をいただいたら直ちにもう何の苦勞もなくなるとか、いわゆるこの世的



な幸せがいっぱいとかが、そんなことは絶対にならない。むしろ苦難が増えるかもしれない。苦難が増えるけれども、苦難はもう単なる苦難ではない。それをぐり抜けていよいよ輝いていく。そういう栄光の姿に変えられていく。そのためのいわば今、修行をやっているんだと。その修行も自分の力ではなくて、キリストという原動力が私の中に宿って、これがプロモーター（発起人、世話人）となって、この地上の歩みをしっかりリード（先導）し、プッシュ（推進）してくださっている。それを見て、また他の人たちも、

「あつ、では、自分たちもそれにあやかりたい」

と、みんなを引き連れて天国へ行く。そのために我々は地上のこれからの生命をいただいている。そのことを忘れないでください。

「もう自分はいただいたから、もう行きますよ、サヨナラ。あなた方は死んでね」

なんて、そんなのじゃないですよ。いただいたものはしっかり分かち与えていく。自然の命ですら、子孫に分かち与えていくわけですよ。だったら、霊の生命、霊の生命を分かち与えることができるのは、霊によって生まれたあなた方しかありませんよ。肉なるものは肉なるものをしか生み出せない。霊なるあなた方が霊なる人を生み出していく。それはあなた方の中に霊なる生命であるキリストが宿っておられるからです。キリストさまがあなた方と一つになって、これから歩んでくださる。そうすると、その方がどんどんどんどん働いて、この世の中で苦しんでいる人たちを天国へと連れて行く。そういう歩みをやっていくんだよと。だから、

「へこたれないで、輝いて、しっかりと生きて行きましょね」

という、こういうエールなんですよ、応援歌なんですよ。まあなんとか……

（以下録音不明）

